
英雄伝説 - 刹那の軌跡 -

天魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄伝説 - 刹那の軌跡 -

【Zコード】

Z5147Y

【作者名】

天魔

【あらすじ】

キーアは最悪の可能性を感じ取ってしまった

彼女は失われつつ有る、力の欠片を振り絞つて願つた

-助けて-と

幸か不幸か、それはある男に届いてしまった

この物語はその男に一通の手紙が届くことで始まる

現実はそこまで甘くはない

それを知りながらも壊そと藻搔く彼らを面白いと思つた

全ては終わりから始まつていた……

歌劇の始まり

初めまして、諸君。

いや、お久しぶりといったほうが良いかもしねないな。
私は怪盗B、世間ではそう呼ばれている者だ。

此度、ファルコムから碧の軌跡が発売されました。
もうすでにクリアした方も多いことだろう。

しかし、いくつかの都合が良すぎる点が気になりますね。
それを少し変えた歌劇を皆様にお見せしたい。

では、その幾つかとはなんなのか？
それは三つござります。

まず一つ目、我らが同志、殲滅天使のことだ。

悲劇にも、この舞台では親代わりだったパテル＝マテルが壊れてしまつた。

ヨシュア曰く、もう直せないこと……

彼女の過去から考えるに彼女はとても弱い。

戦闘能力ではなく、心が……だ。

彼女は今まで殻に籠つていたからこそ、耐えてこられたのだ。
それがエスティル達によつて破られてしまつた。

確かに新たに心の拠り所が出来始めていた。

しかし、如何せんパテル＝マテルほどの奥底までに辿り着くには少しばかり時間が足りなかつた。

そこに辿り着くまでにパテル＝マテルが壊れてしまつた。

彼女は最大の心の拠り所がなくなつたことで今まで耐えてきたモノを守るもののがなくなつてしまつ。

それで起こつたことは彼女の精神崩壊……
彼女は所謂廃人となつてしまつた。

次に二つ目、熊鷺先生ことイアン先生だ。

最後の最後にロイドに説得されてキーアに話しかけたところでマリアベルに攻撃されてしまった。

ここで気になるところがある。

確かに彼女の攻撃は仮死状態にしただけかもしれない。

しかし、その後の手当が遅すぎる。

あれほど遅くなってしまっては血を失いすぎて、死んでしまう可能性のほうが高すぎる。

助かつたとしても田が覚める可能性はかなり低く、仮に田覚めるとしてもかなり遅くなるだろう。

普通に考えて、帝国からのクロスベル解放にはまず間に合わないと見てもいいだろう。

最後に三つ目、アルカンシェルの最大の田玉、イリア・プラティエだ。

彼女はリハビリを経て、再び舞台の上に立つことが出来た。いやはや、素晴らしいの一言だ。

事実は小説よりも奇なり……正にこれを体現する。

しかし、現実というものはそこまで甘くはない。

コレに付いては長くなるので本編で……

これから語る物語はこの三つの可能性を因果を弄ぶ力を失いかけたキーアが知覚してしまったことから始まる。

この三つを感じた彼女はそれではまたロイドたちがとても悲しみにくれてしまふということから、最後の欠片を振り絞つて願つてしまつ。

-助けてーと……

それを感じ取ったのはこれまた面白く、私の親友であった。

彼もまた、私とは近くて遠い美的センスを持つていて、互いに高め合うう同志だ。

あのオリビエの様にライバルではなく、友でもない。

奇妙な関係だが、私は彼にとても惹かれている。

そして、彼が魔都クロスベルに行く理由は、私の一通の手紙が原因だ。

さてさて、長話はコレくらいとして、物語を始めようか。
それでは皆様、この物語が良きものであると願つて
縁がござりましたら舞台の上でもまた会いましょう。
それでは皆様、御鑑賞下さいませ……

歌劇の始まり（後書き）

設定の三つに関しては次回で詳しく書いていく予定です
一つ一話程度になる予定です
更新は一月に一度の予定?
調子に乗ればもっと早いかも

終わりから始まつへ - 前編 - (前書き)

レンに関してはフルコムの設定であるので楽でした
熊髭さんは描くこと少ないからイリアと混ぜる予定です
イリアはやたら長くなりそうなんだすけどね

終わりから始まりへ -前編-

全ては終わりから始まっていた。

「えッ……？」

「どうしたんだ、キーア？」

樹が崩壊する寸前、キーアは感じ取ってしまった。
このままでは訪れてしまう悲劇。

それを観てしまい、それはもう既に手遅れなのを理解してしまった。
一つ目はレンを襲う悲劇、二つ目は先程目の前で仮死状態にされて
しまったイアン、三つ目はイリア……

「そんな……、なんで今更ツツツツ！？」
「キーアッ！？」

かつてロイド達が死ぬことを知った時と同じくらいの悲しみがキー
アの心に溢れた。

それは先程まで明るく希望に満ちていたこの空間が一瞬でそれが塗
りつぶしてしまった。

「そんなダメ！？」
「だ……れ……か……」
「誰……か……」
「誰か、助けてツツツツ！」

力は既になくなりかけていることも承知でキーアは願ってしまった。
否、それを考へることすらなく、只々願ってしまった。
その反作用で何が起きるかも分からぬままに。

そしてそれは幸か不幸か届いてしまった。

因果を弄ぶ力を持つた幼き少女の願いは届いてしまったのだ。
これからどうなるかも解らない儘……

「……たくつ、ガキは脳天氣な顔して笑つてりや良いんだよ。
好きなだけ泣け、笑え、怒れ、子供つてのはそういうもんだ。
小難しいことは大人に全部任せたら良いんだよ……
だから……難しいことは俺に任せろ……な?
さあ、最後は俺だけのソロステージだ」

一つ目の悲劇は、パテル＝マテルが壊れてしまつたことだ。

ヨシュア曰く、もう直せないとのこと……

彼女の過去から考えるに彼女はとても弱い。

戦闘能力ではなく、心が……だ。

彼女は今まで殻に籠つていたからこそ、耐えてこられたのだ。

その殻は、レンがかつて『樂園』と呼ばれていた場所にいた時に作られたものだ。

『樂園』はペドフィリアに対する売春をする施設だった。

そこにはレンと数人の仲間たちがいた。

?リーダーの『クロス』

?好奇心旺盛の女の子・エッタ

?可憐で大人びた女の子・アジュ

?いつも殴られている男の子・カトル

?お姫様の『レン』

それ以外にもいたがレンは『どうでもいい』と思っていた。
しかし、お姫様である『レン』には仕事が来ませんでした。
他の子達が瘦せ細ろえていく中、自分だけはおいしいものを食べ、
お人形で遊んでいれば良かつた。

何故、レンには仕事が来なかつたのか……？

その理由を彼女は『特別だから』と言い、周囲の子供達も『レン』
が喜んでくれればそれでいい、と口にしていた。

普通に考えれば一人だけ苦痛を味わないなんて理不尽が子供たちに
我慢できるわけがない。

けれど、次第に他の子供達は段々と消えていきました。
ある日、『レン』は『クロス』にいました。

「他の子達は何処に行つたの？」と……

それに対して『クロス』の返答はこうだつた。

「ここは元々、僕とレンだけの世界だ」

さうして『クロス』は続けて言つ。

「他のみんなはすぐに殺しちゃつたくせに。
なんで僕だけ生かしておくんだ」

それは『クロス』が疲れていからだつた。

他のみんながいなくなつたから疲れているのだ。

クロスが疲れているから、他のみんなが消えた。

『身喰らう蛇』は崇高ではない無粋な組織を潰す事がある。

今回の対象は『樂園』だつた。

その時やつて来たレーヴェは『クロス』の体にある無数の十字傷を見て言つた。

この無数の『クロス』は自分で傷つけたものだ。
自我を保つためにやつたのだ、と。

つまり、クロスとは『レン』という人格を守るためにつけた傷の事。他の仲間とは、レンが持つの人格の事なのです。
本当に別の子供がいたわけではなかつたのです。
客から様々な注文を付けられ、多くの嗜好に合わせなければならなかつた。

その中で、本当の『レン』を守るために、生まれた人格があの4人。

どの人格も彼女の一^部である。

本当の『レン』という人格は、彼女が自我を保つために、クロスを始め、4人の子供達を生み出だし、演じました。

そうする事で自分を守るしかなかつた。

『クロス』がリーダーだつたのは、傷を刻む事がもつとも彼女を保つ術だつた。

しかし、その最後の人格さえも壊れてしまう時が來た。

もう彼女を守る人格など存在していない。

そして本当の『レン』さえも傷付いてしまう前に身喰らう蛇が『樂園』を壊しに來た。

その後の『レン』は執行者となり、執行者としてとても優秀だつた。天才であつた彼女は、また別の道を見つけたのに、それでも本当の自分ではなかつた。

同じように自我を守る為了の自分を作り出したのだ。

しかし、不幸なことに優れすぎていたからこそ、それは周囲に認められてしまった。

だから彼女の心は全く強くはない。

今までずっと目を逸らし、逃げ続けてきたのだから……

だが、その執行者の『レン』をエステルに壊されてしまった。エステルならば本当のレンを救うことは出来るだろう。

ヨシュアを救つたように。

太陽のように照らすことで、きっと救えるはず

だった。

しかし、すでに縁となつていたパテル＝マテルが壊れてしまった。まだ、心が強くなつていらないレンにとってこの衝撃はとてつもなく大きすぎた。

本当のレンはそれに耐えられはしなかつたのだ。

今しばらく、時間があれば何とかなつたかもしれないが……それに耐えられなかつたレンはまともな受け答えどころか、食事すらまともに喉を通らなくなつてしまつた。

田に田に衰弱していくレン。

それを世話するエステル達もとても悲しんでいた。

キーアはこの光景を観てしまった……

ロイドたちを助けるために勝手に呼び寄せた……

自分の我慢で振り回してしまつたから、彼女はパテル＝マテルは壊れてしまい、レンは廢人へとなつてしまつた……

キーアはその事実を観てしまった。

だからこそこの未来を認めたくなかった。

だから、願つてしまつた

終わりから始まりへ - 後編 -

キーアが知覚した二つ目の悲劇はイアン先生だった。

彼は先程キーアの目の前でマリアベルに攻撃された。

確かに彼女は仮死状態にしただけだったかもしない。

しかし、攻撃の衝撃でそれなりの速度で柱に叩き付けられ、内蔵も幾つか壊れてしまっているだろうということは容易に想像できるだろう。

果たして、それだけの重症を負いながら、明らかに遅い手当で命を取り留められるのか？

どう考へても答えはNOである。

仮に命だけは助かったとしても、目が覚める可能性は極めて低い。

しかし、この事件の後でクロスベルを襲う悲劇。

帝国の侵略に抵抗するにはイアンの力は必要不可欠だ。

ロイドたちの性格などから鑑みると、帝国に抵抗するのは必至。そこで彼の力が欠けた状態では唯でさえ、分が悪すぎる彼らが命を落とす可能性は高くなるだろう。

仮にそうなつてしまつてからでは遅すぎる。

その時にはもうキーアの因果を弄ぶ力はなくなつてしているのだ。

- もうあの時の悲しみを味わいたくない

その一心でキーアは切に願つた。

この要因が彼女に幸せを願う気持ちを強くさせた。

三つ目の悲劇はイリア・プラティエ。

アルカンシェルの花形スターである彼女。

太陽のような彼女は多くの人を魅了した。

舞台の上では勿論、プライベートの時でもその性格や行動で様々な人を惹きつけた。

しかし、彼女はイエーガーのクロスベル襲撃で重症を負ってしまった。脚に関してはもう動くことすら怪しい。

それでも彼女は決して諦めなかった。

リハビリは大きな苦痛を耐え忍び、それでも懸命に真っ直ぐに突き進む彼女の姿は周りからは輝いて見えたことだろう。

そして、念願のリハビリの成果でウルスラ病院の医師によって脚が回復したことを告げられた。

それから彼女は今までの時間を取り戻すかのように舞台で練習を重ねた。

その姿を見ていたリーシャも安堵していた。

リーシャは自分がいたからシャーリイがアルカンシェルを襲撃したと思っていた。

だが、事実はそうではなく、彼女がいなかつた所でイエーガーはアルカンシェルを襲撃しただろう。

そして、練習に練習を重ねたイリアは遂に公演の舞台に上がる。

しかし、ここで悲劇に襲われた。

イリアが舞台に上ることが確定したことにより、新聞社によって大々的に取り上げられることになった。

クロスベルの中でイリアを知らぬものは居らず、誰もが彼女に魅了されていた。

その彼女が襲撃によつて重症を負い、リハビリを経て、再び舞台の上に上がる。

これほど人々を騒ぎ立てるモノはないだろう。

リハービリをしている間も何かと彼女の記事が多く書かれていた。

中には『イリア、再起不能か！？』等といったゴシップ記事が大いに出回った。

時の人である彼女の行動はクロスベル全体に大きく影響を及ぼしていた。

そして遂にその復活劇のクライマックスに悲劇は起きた。

復帰最初の公演のクライマックスだった。

彼女は突如、膝をついた。

その行動に誰もが呆気に取られ、目を疑つた。

そしてそのまま、彼女は倒れ、会場は沈黙に支配された。

誰もが願わず、信じられないことが起こつたのだ。

その日はそのまま幕が降り、イリアは再び病院に行く羽目になつた。そして精密検査の結果、イリア・プラティエは再起不能を申告された。

この日以来、彼女は自分の脚で立つことすら出来なくなつてしまつた。

それはクロスベルに大きな影響を与えた。

イリアはクロスベルにとって大きな希望だつたのだ。

グノーシアの薬物事件、イエーガーの襲撃、クロイス家の野望、そしてディーター大統領による独立宣言。

これら全ての事件がクロスベルに大きな影響を与えた、未だに修復すら儘ならない状況での、帝国の侵略。

その絶望の中でのイリアは正しく希望だつたのだ。

その希望が瞬く間に絶望へと変わつた。

太陽な彼女が一瞬で沈んでしまつたのだ。

明けない夜が無いように、沈まない朝もないのだ。

そして、此度の朝は短すぎて、さらに深い夜を呼んでしまつた。

一瞬の煌きはさらに深い闇を演出するだけに終つてしまつたのだ。

一度でも……

たった一度でも公演が成功していたならば、それは希望になつたかもしれないが、それは果たされぬままに、より印象的な絶望を植えつけただけだつた。

イリアの脚が、まだ少しでも動くならば状況が変わつたかもしれないが、微塵も動かすことが出来なかつたのだ。

クロスベルは希望から一転、絶望の底へと落とされたのだ。

そして、この事件で一番影響を受けたのは他ならぬリーシャだつた。彼女はイリアに対してもろめたく思つていた。

自分の存在が、『銀』という存在が災い呼んでしまつたのだと思つていた。

そして、その数日後、リーシャはクロスベルから姿を消した。彼女はやつと見出した光の道を自らの意志で閉じたのだ。

『銀』へと、復讐の道へと墮ちていつたのだ。

それから『銀』の名は裏世界に轟き始めた。

より残忍、より残酷な殺し方を始めた『銀』

裏世界でその名を知らぬものとなり、大いに恐怖を与えた。

リーシャの失踪はすぐさまイリアに告げられて、それを聞いた彼女は一言だけ呟いた。

「今、あの娘は何処で何やつてるのかしらね……」

その眩いた姿は普段からの彼女からは想像できず、何処か寂しげな姿だつたといつ。

キーアは知覚してしまつた。

この大いなる絶望を、誰もが包まれる絶望を。故に彼女は願つた。

「JRの絶版を希望へと改める可能性を……」

終わりから始まりへ -後編 -（後書き）

これでようやく本編へと入れます
それにしても結構削っちゃいました
無駄に長く書いても変になつてしましましたので
もつすこし表現がうまくなりたいです
…

機械仕掛けの銀組工（前書き）

時間的には零の軌跡の内容になります
これから一気に時間が飛び可能性もあるので、「容赦を

機械仕掛けの銀細工

帝国との国境の境に設置されたベルガート門と呼ばれる関所。

「漸く着いたか」

そこを通り、クロスベルへと向かうと思われる男がいた。
帝国からクロスベルへ入ろうと、今まで乗ってきた物から降りて窓口へと歩いた。

通門審査票に書き込み、窓口嬢へと手渡す。

「お名前はアルクエイド・ヴァンガードさんですね？」

「ああ」

「通門目的は帰宅……

場所は……ローゼンベルグ工房？」

「何か問題でもあるか？」

帰る場所に首を傾げられた事に、疑問を持ち訪ね返す。

「い、いえ……

あの、あなたが人形作りで有名な人なんですか？」

少し狼狽えながら、窓口嬢は目の前の男へ聞く。

クロスベルのローゼンベルグ工房と言えば誰もが知るほど有名だ。

アンティーケ人形で有名な人物がそこにいるという噂だ。

そこで作られた人形はマニアが桁外れなミラを出して欲しがるとい

う。

そこに帰るとなると聞きたくなることだらつ。

そうでなくとも彼女は警備隊の一員だ。

目の前にサングラスをして、黒い生地に深紅の歯車の刺繡がされた
コートを着ている男がいたら不信に思い、話しかけるのは当然だろ
う。

「違う

「そ、そうですか、しつ失礼しました」

冷たく否定された言葉に彼女は慌てて頭を下げる。

「もつ通つても良いか?」

「はつはい、どうぞ!」

アルクエイドはそれを聞くとここまで乗つてきた物に戻つていった。
乗り物に近づいて行くと恐らくそれが有る場所を中心に入りの円が出
来ていた。

・また何時ものことか

それを煩わしく思いながらも戸惑いなく歩いていく。
そこに集まっている人を搔き分けながら歩む。

「人の物に纏わり付かないでくれないか?」

「これはあなたの物ですか?」

乗り物の場所まで行くと一人の警備服を着た少女が立っていた。

「 さうだが、それが何か？」

「 あなたのコレは何でしようか？
一見、タイアがあることから乗用車の一つだと想ひのですが、こう
いう形は見たことないです」

オーバーサイクル

「 魔導一輪車って言ひ、まあ車の一種だな。

一輪車だから色々面倒だが、その分便利ではある」

「 いえ、そういう意味ではなくて……」

「 ああ、法律上の問題か？」

「 一応一般乗用車として登録もあるし規律も守っている」

「 さうですか、それは失礼しました」

それを警備隊の少女は敬礼して謝罪をする。

「 気にしないでくれ、こいつのことだ。」

「 あー、えーっと……」

「 私はノエル・シーカーといいます。

階級は曹長です」

「 と云う訳だ、曹長。

もう行つてもいいか？」

「 はい、結構です」

アルクエイドはオーバーサイクルに跨つてエンジンをかけた。
一定のエンジンの駆動音と心地良い振動がアルクエイドの体に伝わ
つていく。

「ああ、そうだ、余計な手間をかけた手間賃だ。

「一つ渡すから、窓口の奴にも一つ渡しておいてくれ」

そう言つてアルクエイドは、腰に付けたバッグから無造作に丸い銀色の物を一つノエルに投げ渡した。

同じ物が幾つも入っているのか、手を入れた時にガチャガチャと音がした。

ノエルが慌てて受け取るのを見ると一気に加速して瞬く間に姿が小さくなつていった。

「彼は一体誰なんでしょうか？」

ノエルは突然の行動にも驚きながら、その後姿を見送った。

彼の姿が見えなくなるまで呆然としていた。

彼女は手元にある、先ほど投げ渡された物を見るとすぐさま驚愕した。

「えっ！？」

「コレって……」

銀のチョーンに結ばれたそれはある機械だった。

そこに刻まれた盾と翼を組み合わされた紋章の上にVの文字。

これは世界で有名な銀細工のエンブレムだった。

それは誰が造つて いるのか、どこに住んで居るのかさえ謎に包まれた作品だった。

ある時は裏社会のオークションで、ある時は田舎町の露天商の中に

売られている場所すらも不特定で、出品者は知らない奴から買った
と言ひ。

オークションではその国の大物だつたり、露天商では前から居た浮浪者や捨て子から買ったという。

作られた物は様々で、何かの像であつたり、時計だつたり、アクセサリーだつたりする。

有名な芸術作品はある種の法則性が必ず存在する。

絵ならば書く対象、細工ならば造る種類といった風に。

それは各個人の誇りや求める物が起因するからだ。

こういう天才と呼ばれる狂人は、何かを極めることで産まれる。その何かに重点、誇りとして搖るぎない物が存在するからだ。故にそれを根底に置いた統一性があるはずなのだ。

しかし、これは何も統一性が無いのだ。

敢えて法則性を上げるならば素材が銀と言つことだけ。

何故制作者が個人だと分かつた理由は全ての品に小さい深紅の歯車とその上にAと刻まれていたからだ。

そして、一番の謎はどうしてそれが有名になつたのか……だ。

それはこのHンブレムを刻まれた最初の品が原因だつた。

最初の品は5年前にある捨て子が質の悪い商品に売つたことが始まりだつた。

その捨て子がある日、目覚めるとその紋章が刻まれたペンダントを握つていた。

それを見た捨て子は、ある優しい人が価値ある物をくれたのだと喜んだ。

その捨て子は大はしゃぎで近くで開いている露天商に売りにいった。

その露天商は物を見る目があつたのか、捨て子の持つているペンドントがとても価値ある物だと思った。

しかし、意地悪な露天商は數十ミラで捨て子から買い取った。思つた程ではないと思つた捨て子だったが、數十ミラも渡されると駆け足で去つていった。

それにはくそ笑んだ露天商はそれを数万ミラで売りに出した。しかし、流石に高すぎたのか、その日はそれは売れなかつた。少ししょぼくれながらも帰つた露天商だったが、次の日から現れなくなつた。

数日後、不思議に思つた捨て子は、人に聞いてみるとペンドントを売つた次の日にバラバラ死体で見つかつたといつ。

それに驚いた捨て子だったが、次の日田観めると、手に死んだ露天商に売つたはずのペンドントがあつた。

また誰かがくれたと思つた捨て子は売ろうとしたが、あの露天商は既にいなくなつていて。

仕方なく、捨て子はペンドントを首からかけながら街を歩いていた。すると、捨て子は老婆から声をかけられた。

「坊や、良いペンドントをしてあるね。
それを売つては貰えぬかの？」

声をかけてきた老婆は街で有名な人で、アクセサリーを集めるのが趣味で世界中から集めていると噂だつた。

捨て子は喜んで売ると数万ミラも手渡された。

ペンドントがそれ以上の価値があると見た老婆は捨て子を遠い町の孤児院に連れて行つた。

孤児院に連れて行かれた捨て子は今もその老婆と交流を保ちながら、孤児院で暮らしている。

それ以降、度々世界にそのエンブレムの品が至る所に出回り始めた。その品々はわざと価格を低く買つと購買者が謎の死を迎えることが幾度も起きた。

その品々は曰わく品として世に出回った。

裏社会のオークションで売られている理由はそれだった。芸術作品としても価値が高いとされるそれらは、買つものが後を絶たない。

そして今から3年前に表社会にも出回り始めた。

それはアクセサリーなどの小物を主に、IBCが売り始めたのだ。それも子供のお小遣いで買える値段だ。

これは裏社会に大きな影響を与えた。

普通の品が世界に出回つたことで曰わく品の価値が下がつたのだ。それを原因に世界中の有名人が制作者を捜したが何も情報が得れなかつたのだった。

そして本の1ヶ月前にまた新たな品が出回った。

それは魔導動物オバペットと呼ばれる電子ペットだつた。

銀時計サイズの細工で開くとモニターとスイッチが数個ある。モニター内で好きな動物が飼えるという物だつた。

これは特に女性に大いに売れた。

10種類のタイプがあり、それぞれ飼えるものが違う。

一つのタイプに3種類のペットが飼える。

しかし、これは数がとても少なく、一番人気のタイプは数十万ミラで取り引きされている。

ノエルの受け取つた銀細工はそれだつた。

「銀の翼と盾、それに深紅の歯車……

それに、これはオーバーペットの一番人気タイプ！？
間違いなく本物のアルゲントウム製品！

本当に何者……？

軽く投げ渡されたそれを落とさないよう気に付けながらもアルクエイドが消えた方角を眺めていた。

四肢の魔獣事件を調べている特務支援課。

その四人はマインツへと向かう途中にあるローゼンブルグ工房前へと着いていた。

「ローゼンブルグ工房……？」

「ああ、此処が……」

がつちりと閉められた鉄の柵に掲げられている看板の文字を読むとエリイが納得するように呟いた。

「あら、お兄さんたちだあれ？」

彼らの後ろにスミレ色をした髪のゴシック調のドレスを来た少女が立っていた。

「君は？」

「あら、レディの名前を聞くときはまず自分から名乗るものよ？」

「ははっ、意外にませていいじゃないか、お嬢ちゃん」

「アーティスト、俺はロイド」

「おへじんか」

ヨイドの血圧紹介を皮切りに次々と名を名乗る。

「おへじひがんげんてー

レンはドレスの裾を軽く摘み上げてお辞儀をする。
ロイドたちはレンに最近起こっている魔獣事件について聞いてみた
が此處に来たばかりで何も知らないことのこと。
工房の主も居ないことをレンは言つてロイド達は立ち去ることに決
めた。

「それじゃ、何かあつたらいつでも頼つてくれよ?」

「じゃあ、早速だけど、聞いてもいいかしら？」

日イエの詠葉コレンを訪ねてみた。

「空のより蒼い髪と海のより深い青の瞳をしたお兄さんを知らないかしり？」

「いや、知らないな
皆は知っているか？」

「いや、俺も知らねえな」

「私もよ」

「……私もです」

「蒼い髪ってティオ助みみたいな色なのか？」

「いえ、もうちょっと濃い色よ。

色々と田立つ人だから知っていると思ったのだけど……」

「君のお兄さんかい？」

「いいえ、でもそんな感じかしら」

兄と言われてくすくすと可笑しそうにレンは笑う。

「お兄さんたちが知らないならまだ帰つて来てないのかも」

「一人で大丈夫なの？」

「大丈夫よ、レンはお姉さんだから一人でお留守番出来るわ。
それじゃあね、支援課のお兄さんたち」

そう言つてレンは鉄門を潜つて行つた。
レンが通ると門は独りでに閉まつてしまつた。

「なあ、俺たちつて支援課のこと言つてないよな」

「あつ」

「クロスベルタイムズを読んで知つてたんじゃないのか？」

「そつなのかもね」

「それにしても蒼い髪ですか……」

「お、ティオ助、気になつてるのか?」

ランディが何処かニヤニヤとした顔でティオに尋ねる。

「いえ、自分と同じ髪色と言われて気になつただけです。決して、ランディさんが想像したようなことではありません」

彼らは和気藹々と談笑しながら分かれ道へと降りていった。

西クロスベル街道から市内を通り、マインツ山道を通り、その途中に現れる魔獣たちを躊躇しながら道を突き進むオーバーサイクル。

「ここの辺も大分整備されたな」

今ではバスも通る道は完璧に石畳へと整備されている。土のよう大きな振動にならずに細かい振動がアルクエイドの体に快い揺れを与える。

途中、クロスベル市内の整備のされ方はやや異常とアルクエイドは思った。

他の国を見てきたからこそ、何か違和感を感じていた。

「まあ、俺には関係ないか。

そういうや、今はクソジジイが居ないんだっけか……」

山の中腹に来た辺りでローゼンブルグ工房の方から四人組が歩いてくるのが見えた。

「ん?

うちの密にあんな奴らいたか?

アルカンシエルの新人か?」

ローゼンブルグはクロスベルの劇場の機械の作成から調整まで受け持つている。

その関係あるとアルクエイドは思った。

「なあ、君たち。

うちに何か用事か?」

アルクエイドは丁度全ての階段を降りてきたロイドたちに話しかけた。

「はい?」

「今ローゼンブルグから歩いてきただろ?」

「そうですけど……」

「おい、なんだこれは?」

「分かりません、乗用車のよつて走つて来ましたけど……」

ランティとティオがアルクニードのオーバーサイクルに興味を示した。

「空のよつて蒼い髪に海のよつて深い青の瞳……
レンかやとの言つていた人かしり?」

「レンを知つてこるのか?」

「ええ、先程工房前で会いました」

それを聞くとアルクニードはオーバーサイクルのハンドルの下に嵌つている何かを弄り出した。

「はい、何かしら?」

するとどこから先程ロイドたちが出合つたレンの声がした。

「帰つてこら連絡しろつて俺が言えた立場じゃないな」

「その通りよ、分かつてこるじやない。
それよりも早く帰つてきてもらひえないかしら?
もう3日も待つてこらのだけれど……」

「ちつ、ちつ、こ、すぐ行へ

「早くしてね。

さうやう、近くこらの救援課のお兄さんたちにお礼を言つておこ
て」

それを告げるとレンの声はしなくなつた。

「だ、そうだ」

「えっと、今のは……？」

「通信機を使った通話だが？」

「いえ、そういう意味じゃなくて……」

「なあなあ、それよりもよ。

兄さんが乗つていてそれを教えてくれよ

「そうですね、私も気になります。

こんなのが見たことがあります

ランディとティオは目を輝かせていた。

「オーバーサイクルだ。

また後で工房に来るといい。

その時に詳しく解説してやろつ。

今は五月蠅い娘が待つててのうでね

「あのませた嬢ちゃんか」

「分かりました、明日こでも早速寄らせていただきます」

ランディ、ティオだけでなくロイドたちも目の前のモノに興味津々
だったが、今は事件を追っていることを忘れてはいなかつた。
事件を優先させるために彼らは再びマイインツへと向かい始めた。

「支援課……特務支援課か……」

Bが興味を持つた1つか。

一人、いや二人か。

赤毛ともう一人、血の臭いがするな。

ロイド・バニングス、リベールの時の奴に比べると分かり難いな。
まあ、アレは馬鹿みたいに分り易すぎただけか

彼らの後ろ姿を見ながらアルクエイドは苦笑した。

再び、エンジンをかけるとオーバーサイクルは階段を物ともせずに
登り始めた。

機械仕掛けの銀細工（後書き）

魔導一輪車と魔導動物ですが、これはエニグマの動力を内包している設定です

魔導動物の動力はクオーツで言つ機功の効果を内包してあるものが使われており、半永久的に使えるようにしてあります

機械仕掛けのお人形（前書き）

自分でも驚くほど執筆速度

その分脱字誤字が多いかもしれませんが見つけ次第随時直していきます

機械仕掛けのお人形

「いやあ～、あのオーバーサイクルって奴は格好良かつたなあ～」

ロイドたちはアルクエイドと分かれた後も彼が乗っていたオーバーサイクルに花を咲かせていた。

「それにしてもアレは何処で作られたのでしょうか？」

エンジンの小型化はまだ何処も成功していないはずです

「あの工房なんじやないのか？」

「あそこは関係者みたいだし」

「案外そうかもしないわね。

あの工房は何を作っているのか、良く分かつてないみたいだし……もしかしたら、あのアルゲントウム製品もあそこで作られているのかも知れないわね」

「アルゲントウムってあのオーバーペットのか。

でもあれはIBCが作っているんじやないのか？」

「いえ、確かにIBCが売り出していますが、私はアレがあのビルで作られているのを見たことがありません」

「それにあの人、何処かで見たことがあるよつな……」

ロイドたちが会話している間に途中にあるトンネルを抜けた時だつた。

狼の遠吠えが辺りに響き渡つた。

「ツツー!~」

「近いぞ!~」

「彼処です」

ティオが崖上を指差す。

その先には蒼と白の毛並みを持つ狼がいた。

その狼はロイドたちを直踏みする田で見詰めていた。

「ウオーン……ウーハルル」

敵対心もなく暫く唸るよつに吠えると崖の上へと飛び降つていった。

「え、えっと……」

「彼が言つには『最後の欠片は』の後に後はお前たち次第だ』 そつです」

「言葉が分かるのか、ティオ助?」

「ニコアンスだけですが……」

「私たちが知らない何かがあるとこつことね」

「そのよつだ、みんなあと少しだ、行くぞ!~」

「「「おひ」」「」

階段を物ともせずにオーバーサイクルで登り切ると自動で開いた門と工房の扉を確認すると乗つたまま入つていった。そのまま室内を走り、ある部屋に入り、止めた。

「お帰りなさい、マキナ」

「やつちで呼ぶんじゃない」

その部屋の片隅にある端末でレンがかなりの速さでキーボードを叩いていた。

「で、何しに帰つて来たんだ？」

「お爺さんにパテル＝マテルをメンテして欲しかったのよ。あなたが代わりにしてくれないかしら？」

「一応、俺の分野外なんだがな……マイスターは何処に出掛けてるんだ？」

「知らないわ。

「どうよりもそこは養子であるあなたの方が詳しいはずじゃない」

「養子と言われてもな」

レンと会話しながらもアルクエイドは近くにぶら下がっている工具一式が入っているベルトバッグを掴むとパテル＝マテルが固定している鉄錠を登る。

「久しぶりだな、パテル＝マテル」

アルクエイドが巨大人形に話しかけると目の部分が点滅し、音声暗号が鳴る。

パテル＝マテルの装甲や関節などの隙間を確かめ、動力源や配線を確認する。

最後に噴射口を覗いた時にアルクエイドはレンに向き直った。

「お前、一体コイツに何させたよ。

問題は色々あるが、特に噴射口だ。

どれくらい長距離移動させた？」

「別に、ただ半年くらい飛び回ってただけよ」

半年と聞いてアルクエイドは頬を引き攣らせた。

「無茶させすぎだ、ド阿呆！」

アルクエイドが怒鳴つてもレンは素知らぬ顔で端末で何処かにアクセスし続けている。

「たくつ、せつかくパテル＝マテル用に作っていた物があるがこれじゃ渡せないな」

「あら、パテル＝マテルの為つて何を作つたのかしら？」

「まだ途中だ。

それにもう少し丁寧に扱わないと渡せないからな」

パテル＝マテルの噴射口に工具を突っ込みながらアルクエイドは言う。

渡せないといつ言葉にレンは可愛く頬を膨らませる。

「もう、いけずね」

「なんとでも言え」

言い争いをしているように見えなくもない一人にパテル＝マテルが幾分先ほどよりもトーンが低い音声を鳴らす。

「大丈夫よ、別に喧嘩しているわけじゃないわ」

レンの言葉に答えるよつにパテル＝マテルも音声を鳴らす。

「パテル＝マテルはレンに甘すぎだ。
ちゃんと叱ることも覚えるよ」

「私はそこまで子供じゃないわ。

もう立派なレディよ」

端末に向かっていたレンはアルクエイドの方に向くと後髪を搔き上げて髪を風で靡かされていくよつに見せる。

「はん、 もう少し体に凹凸が出来てから言つるだな

アルクエイドはそんなレンを横田でちらりと見ながら鼻で笑う。

「あら、 そんな脂肪が合つても邪魔になるだけじゃない。

そんなモノよりも若さが一番じゃない

そう言つてレンはいつの間にかアルクエイドの背後に移動していく、耳に囁いた。

「はいはい、 そういうことは嫌いなんだ。

それはあのエステルとか言つ、 ひざこ女にしてやるんだな

アルクエイドは立ち上がりつてレンの首根っこを掴み上げ、 そつと先程までレンが座つていた端末前の椅子の方に投げる。投げられたレンはまるで猫の様に空中で一三回回転すると足からちやんと着地した。

「もひ、 レディの扱いがなつてないわよ。
相変わらず乙女心に鈍いのね

「あーはいはい、 鈍くて結構。

俺は物作つてたらそれで十分だ

アルクエイドは噴射口のメンテが終わったのか近くにある色々なものが乱雑に置かれている机に歩み寄つた。

その机の上からH-1グマに似た物体を掴むとパテル＝マテルに登りだした。

パテル＝マテルの顔近くまで来ると、 首の横にあるハッチを開けてそれと配線を幾つか繋ぎだした。

繋ぎ終わるとそれごと戻してハッチを開めた。

「レン、お前のエニグマを貸してくれ」

「エニグマって新しい方?」

「それとも古いほうかしら?」

「ペckettの方だ」

レンのエニグマは普通に警察や遊撃士に配布されている通信やアーツ用のエニグマだけでなく、アルクエイドがそれに加えてオーバーペckettの機能をえたエニグマ＝Mを持っているのだ。

アルクエイドはパテル＝マテルの肩から飛び降りてレンが取り出したエニグマ＝Mを掴むと、オーバーサイクルに引っ掛けられている最初に彼が持っていたバッグに手を突っ込む。そこから携帯用端末を取り出すとエニグマ＝Mと繋ぐ。

「何を入れるのかしら?」

気になつたレンはモニターを覗くとパテル＝マテルのパラメータが表示されていた。

アルクエイドがソフトを起動させるとすぐさまパーセンテージバーが現れて物の数十秒で100%と表示された。

アルクエイドはエニグマ＝Mを外すとレンに手渡した。

「通信機能の所を開けてみな

「これは……」

言われた通りに通信機能を起動すると選択肢が現れて、そこにP＝

Mと表記された物があった。

今まで見たことがない物を選択してみるとモニターにパテル＝マテルの顔が現れた。

パテル＝マテルが音声を発するとモニターに文字が現れた。

「電波が届いているところならそいつがあれば何処でもパテル＝マテルと会話できるようになる」

「す、いわ、これでいつでもパテル＝マテルとお話できるわ」

「後、その状態で少しばかり消耗が激しいがチエス、トランプなど の///ゲームも出来るよ！」にしておいた

「ありがとう！」

「アル、大好きよ！」

「つおつ…？」

レンは笑顔で横に立っていたアルクエイドに飛びついた。
いきなりのことに驚いてレンが飛びついてきた衝撃で少し躊躇^{ちゆうちょ}した

「ほらほら、気軽に男に飛びついたりしない」

アルクエイドは首に回された腕を掴んでレンを抱き抱えると、腕を外してゆっくりと下ろした。

「ヒカル君前はネットで何してんだ？」

「クロスベルで面白い子を見つけたのよ」

他にも色々と面白いことになつてゐるみたいよとレンは呟く。

「それよつもビックリして急に戻つて来る」と云つたの？」

「ああ、Bから手紙が来たからな。
読んでみたら、クロスベルでリベールの時に面白いモノを見つけたとさ」

「相変わらずブルブランとは仲がいいのね。

それで彼が来るなら分かるけど、なんでアルが来たの？」

「私が我が姫君を見つたように、親友である君の姫君が見つかると思つよつて書いてやがつたんだよ」

アルクノイドは親友の気障な言い回しに肩を竦ませながら言った。

機械仕掛けのお人形（後書き）

次回で漸く手紙が出せます
長い序章です

B かぎの用紙（前書き）

いわでよしあく序章が終わりです

-助けて-

空高く、空気を切り裂くような速度で鷹が飛行している。

口に紙切れを咥えたまま幾つもの山を超えて飛び続けている。

鷹は帝国内の山の山頂付近に存在している小屋を田指して降下し始めた。

辺りは既に暗くなつており、本来鳥田でもともに飛ぶことが出来ない筈の夜をその鷹は飛んでいる。

小屋が見えるところまで来ると鷹は一鳴きしてから上部にある円形の切り抜かれた空間から室内へと飛び込んだ。

「ファルケか。

誰からだ？」

鷹の鳴き声が聞こえたアルクエイドは先程まで磨いていた銀片翼のペンダントを置くと鷹の止まり木へと歩いた。そこには「親愛なるAへ」と書かれていた。

「Bからか。

定例会は終わつたばかりなのに何の用事だ？」

アルクエイドとB、ブルブランは互いの芸術の価値観を語り合つ回合を年一回のペースで開いている。

アルクエイドは作った銀細工の、ブルブランは人の気高さや崇高さを語り合つ。

それは互いの思考や創作などを高めるために大いに役立つていた。

アルクエイドは止まり木の近くにある箱に手を入れて、一匹のネズミを掴むとファルケに投げた。

ファルケはネズミを咥えて飛び立て行つた。

ファルケは与えられたネズミをそのまま食べるのではなくて、山に放ち一定の距離を保ちながらネズミと追いかけっこをするのだ。普通の鷹の能力を軽く凌駕するファルケからネズミは逃げられはないのだが、それを理解しているファルケは遊んでいるのだ。

精神的にネズミを追い詰めるために朝まで追いかけるのだ。逃さずに、捉えずに、追い詰めていく。

そうやつてネズミを疲労困憊にして動けないとこりを躊躇り寄つて食すのだ。

「一体その趣向は誰に似たのやら……」

アルクエイドは相棒のその趣向に肩を竦ませながら呟く。

先程まで磨いていた歪な形をした銀片翼のペンダントを掴むと手紙に封をしてある身喰らう蛇の紋章に翳す。

翳した瞬間に紋章が淡く光り、独りでに封が開いた。

その中にある紙を取り、開いて読み始めた。

「親愛なるAへ、如何お過ごしだろうか。
こないだの……」

親愛なるAへ、如何お過ごしだろうか。

こないだの定例会は實に有意義であったよ。

あの時は愛しの姫君を見付けたばかりだったので、少々熱く語つてしまつた。

そのせいか、私ばかり語つてしまつたよつだ。

それで気づいたのだが、親友である君はまだ愛しの姫君を見つけ

てはいなかつたはずだね？

いやいや、別にそれを貶しているわけではないよ。

それは出会う時に出会うと言つものだ。

正しく運命という他ないのだ。

君にはまだその時が来ていないというだけに過ぎないのだよ。

そこで私が今回筆を取つたのは、君に伝えたい事があつたのだよ。

クロスベルと言う都市を知つてはいるかな？

そう、君が所有している劇場があるところだ。

その都市でつい先日、警察に特務支援課と言つまるでギルドのようなことをする物が出来たのだよ。

最初はただの警察の庶民への人気取りかと思つたのだがね。

なかなか、あの都市では面白いと思ったのだよ。

政治家や犯罪者、そして他の国の思惑……

そういうた遊撃士だけでは到底入り込めない場所に入り込めると

いうのは大きな強みといえるだろう。

まだ本人達には理解はできていないみたいだがね。

遊撃士とは違つた面白さが味わえると思うよ。

そしてもう一つ、君に伝えたい事がある。

むしろこちらが本題だ。

その君の所有している劇場に興味深い新人が入つたのだよ。

とても血の臭いがする新人がね……

彼女は未だ一本の線が弱々しく感じるが、成長したらどうなるだろうか？

彼女からは大きな悩みを感じる。

どうだらうか、その彼女を見てみたくはないかな？

私が思うに彼女は君にとても合つと思つたのだよ。

気紛れとしても構わない。

一目見に行つてはどうだらうか？

「アルカンシェルに新人ね……
別にどうだつていいんだけどな……」

そのままアルクエイドは手紙を今までの分を纏めている机に置こうとした。

「助けて」

「……ツツー？」

何か痛みを感じたのか、アルクエイドは軽く頭を振った。

そして、手元の手紙に目を落としてから、本来両翼であつた銀翼は斜めに欠けており、片翼となつているペンダントに目をやつた。

「そうだな、気紛れに懐かしの我が家へと帰つてみるか。
マイスターの顔でも見に行つてやるか」

そう言つて手紙を机に放り投げて、壁に掛けてある黒生地に深紅の歯車の刺繡がしてあるコートを手に取り、それの懐に銀片翼のペンダントを入れる。

製作途中の品をベルトバッグに入れて腰に付ける。

「おつと、Bに返事を出しておかないとな」

軽く手紙の返事を書いてから止まり木に貼りつけておく。
これで朝になつたらファルケが帰つてきたら、すぐにブルブランを持つて行つてくれるのだ。

最後にエニグマを掴んでから小屋を出た。

「さて、数年ぶりに帰るとするか

オーバーサイクルに跨り、ハンドルの下にある溝みにエニグマを嵌める。

動力が埋めこまれたことで起動し始める。

アルクエイドは一気に加速して山を駆け降りていった。

ブルーブランから来た手紙の最後には、後数文書かれていた。

私が我が姫君を見つけたように、親友である君の姫君が見つかると思うよ。

君にも私の芸術を真に理解できる日を願っている。

そして、今度あつた時は君の大事な銀片翼が、何故歪に欠けているのか教えてもらいたい。

君の親友、Bより

と締め括られていた。

Bから手紙（後書き）

オーバーサイクルの見た目なのですが、ブラックロックシューターのゲームに出てくる奴にそっくりとしています

期待の新人（前書き）

なんかやたらとレンがえつちい娘になっちゃってる……
少し自重したほうが良いだろうか？
ませた子供ってなかなか難しいです

期待の新人

「それでクロスベルに帰つてきたわけね」

アルクエイドが数年ぶりにクロスベルに帰る原因となつた手紙の話をレンは黙つて聞いていた。

けれど、そこがレンは気になつた。

「でも、変な話ね。

アルはブルプランに言われた程度で、帰つて来るようなタイプじやないでしょ」

「だから、言つただろう。

気紛れだと」

だからこそレンはおかしいと思つた。

彼は物を作つているときに素材を買つことや作品を売りに出すことすら基本的に代理人を使うくらい、外に出ることを面倒くさがるのだ。

ましてや、一番大事な銀片翼のペンダントを磨いている最中に出掛けるなどこれまでしたことがない。

まるで、誰かにそつなるように仕組まれたとしか……

「それで、ブルプランの言つている新人には会いには行かないの？」

「アルカンシェルにか……

だが、もうすでに夕方だしな」

「明日はあの支援課のおにいさんたちが来るんでしょう？」

だつたら、今から行きましょつよ

「行きましょつつてお前も来る気か

「当然じゃない、ほり行きましょつ

レンはアルクエイドの手を掴むとオーバーサイクルの方に引っ張る。

「ウォータスなら暗くなる前に行けるわ」

「仕方ないな、暴れるなよ

アルクエイドはレンに引かれるままにウォータスと呼ばれたオーバーサイクルに近づく。

ウォータスに跨るとレンは彼の背後に乗り、腰に手を回した。

「前じゃなくていいのか?」

「別にどっちでもいいじゃない。

それに、こっちのほうがアルは嬉しいんじゃない?」

わざと胸を反らしてアルクエイドの体に密着しながらレンは言つ。その行動に溜息をつきながらアルクエイドはハンドルを握る。もう何を言つても無駄だと諦めたのだ。

「それじゃ、パテル＝マテルは留守番を頼むぞ

「良い子にしててね」

「良い子にするのはお前だわ」

アルクエイドとレンの言葉に応じてパテル＝マテルは音声を発した。

それを聞き遂げるとアルクエイドはウォーカスを発進させた。

クロスベルへの道中の魔獣は、ウォーカスの排気音や振動を感じると逃げ出すのがほとんどだが、偶に恐怖からの行動で襲いかかってくるものもいる。

それらに対してもウォーカスに嵌められているエニグマがオートで威力の弱いアーツを起動させる。

それは土属性の防壁を模したものだった。

それによって一瞬弾かれて魔獣はウォーカスに近づく前に過ぎ去つてしまつ。

クロスベルの歓楽街の田舎と成っている劇場、アルカンシェル前にアルクエイドとレンは到着した。

「相変わらずキラキラと派手ね」

「ひついう物は田立つ方が都合が良いからな。
わざと悪趣味な金色にしているんだ」

スタッフとレンはアルクエイドの後ろから飛び降りて、真正面からアルカンシェルを見上げる。

アルクエイドはその間にアルカンシェルのスターである、イリア・プラティエの描かれた看板の横にウォーカスを止めた。

「いつも思つただけど……」

「ちいちそれに興味持たれて相手するのが面倒なら、そんな目立つところに置かないほうがいいんじゃない？」

「別に隠さないといけないような事はしてないからな

歓楽街は夕方でもそれなりに人が多いため、すでに物珍しさからちらちらと遠巻きからウォータスを見ている者が少なくない。しかし、持ち主がいるからか、あからさまに近寄つて来る者はいない。

アルクエイドがアルカンシェルの入り口に向かつて歩き出すとレンはその横に連れ添つて歩いた。

アルカンシェルの舞台には数人が舞い踊り、舞台裏にはそれに合わせて機械を移動させる。

控え室の方には小道具の修理や調整、服の解ほつれた所を縫い直したりしている。

全員が一体となつて劇を製作しているのだ。

暫く予定の物語の練習をしていると休憩に入り、各々が水を飲んだり、座つたり、雑談を始めた。

「リーシャもなかなか様になつてきたじゃない

「本当ですか？」

この劇団のスターであるイリアが先程まで一緒に舞つていた相方に

声を掛ける。

つい先日、入ったばかりの新人であるリーシャはイリアにそう言わ
れて嬉しそうに笑う。

「ええ、入ったばかりなのに凄いじゃない」

「本当だよ。

イリアが連れてきた時には少し不安だつたけど、これなら問題な
いわやうだ」

「当然じゃない、この私が直々に連れてきたんだから」

傲慢とも取れるイリアの発言だったが、それを不快に感じる者はい
ない。

それは彼女の自信の表れであるし、彼女からそう言われることがむ
しろ光栄なことなのだ。

「そう言えばリーシャは入ったばかりだからオーナーに会つたこと
はないわね」

「と云うか、半分くらいは顔も知らないんじゃないかな？」

「え？

あなたがオーナーじゃ無いんですか？」

「私は代理人に過ぎないよ」

いつも事務的なことをしている老紳士がオーナーだと思っているも
のが多いだろ？

リーシャもその一人で、オーナーが別にいると初めて知った。

「まあ、もう何年も顔すら出しきらないからね。

//リアだけはいつも決まった日に送られて来るんだけどね」

「私でさえも数回しか会ったことがないわよ」

「イリアさんでもそんなに少ないんですね
どんな人なんですか？」

「知らないわよ。

私たちの中じゃ、他国のお偉いさんつてのが一番濃厚だけね」

「何処の誰で、何してるかも誰も知らないのよ。
格好はいつも決まってるんだけどね」

「そうそう、いつも黒色のコートに深紅の歯車が描かれたのを着て
来るんだ」

オーナーだと思っていた老紳士が格好を言つと、リーシャが入り口
の方を見ながら言つた。

「入り口のあの蒼い髪の人ですか？」

「そうそう、空のよろに蒼い髪を……している……ね

言つていらない髪の色を言われて、入り口の方を向くと話題の人物が
そこに立っていた。

その姿を見たとき、老紳士は絶句した。

「オーナー……？」

その人物が誰であるのか理解すると、慌ててアルクエイドに駆け寄つた。

アルクエイドは劇場の中を見渡しながらイリアたちの方に向かって歩いている。

初めて中に入ったレンは興味深そうにキョロキョロしている。

「オーナー、事前に連絡を下さつたらお迎えにあがつましたの」「

「皆の練習を邪魔するわけにはいかないだろ？」「

それにそんなモノは必要ない」

「いえいえ、オーナーにそんな失礼なことは出来ませんよ」

「敬語も要りんと畜のう」……」

言つても態度の変わらない老紳士に気付かれないように、アルクエイドは溜息をついた。

「お久しごりね、アルクエイド」

「やうだな、イリア・プラティエ」

「なんでわざわざフルネームで畜のよ」

老紳士と違い、イリアは気軽にアルクエイドに声を掛ける。

「ねえ、アル。

少し中を見てきてもいいかしら？」

「皆の邪魔をしないようにな」

「もう、分かつてゐるわよ」

レンは少し頬を膨らませながらも、楽しそうな足取りで樂屋裏の方に歩いて行つた。

「それで、本田は如何な御用で？」

「いや、特に用はないが……悪かつたか？」

「いえいえ、オーナーならいつでも大歓迎です」

「そうよ、別にそういう事を気にしなくていいわよ」

あくまでも老紳士は丁寧な物腰で、イリアは友人の様に相手する」とにリーシャは戸惑つていて、碌に挨拶することが出来ない。

「君が新人か」

「は、はい。

リーシャ・マオといいます」

「あら、何処から聞いてきたの？」

「新人が入つたなんてよく分かつたわね」

新人だと言い当てたアルクエイドにイリアは指摘する。

誰も連絡先を知らないから、何時誰が入つたかなどアルクエイドは知らないはずなのだ。

「一応所有者として知つてはおかないと云はなければ」

「私が入ったときはいちいち来なかつたくせに。
ダメよ、リーシャは私のものなんだから」

「イリアさん！？」

「別にどうでもいい」

突然のイリアの発言にリーシャは声をあげる。
しかし、アルクエイドは心底どうでも良さそうに咳いた。

「うわっ、失礼な人ね。

相変わらず乙女心が分かつてないわね。

そこは対抗心を見せておくものよ」

「よく言われるよ」

「だつたら治さうとしたしなさいよ」

イリアの言葉にアルクエイドは気が向いたらなと返事した。
その言葉にイリアは呆れてしまつた。

「それじゃ、俺はアイツを迎えてくるよ」

「ええ、分かったわ」

アルクエイドはそれで会話を打ち切り、樂屋裏の方に歩き出した。

「そうだ、今度はどれくらい居るの？」

「さあな、数カ月はいる予定だ」

「あら、かなり長いのね。

だったら、今度私の家に寄つていりつしゃい。

良いお酒を用意しておくれわ」

「楽しみにしておくれよ」

アルクエイドは背を向けたまま軽く手を振つて楽屋裏へと消えて行つた。

「あの人、全く隙がなかつた

リーシャは暫く消えたアルクエイドの背中を眺めていた。

「どうしたの、リーシャ？

あら、彼が気に入つたのかしら？」

「そ、そんなのじやあつませんよ」

意地の悪い笑顔を浮かべたイリアの言葉にリーシャは慌てて否定する。

そう言いながらも、彼女の意識は彼の消えた場所に向いたままだつた。

期待の新人（後書き）

ウォーカスはラテン語で咆哮と言う意味です
基本的にアルケエイドに関することはラテン語にしています
アルゲントウムは銀と言う意味です
ファルケは鷹です
まんまですね……はい

傍観者達の思惑

レンを探してアルクエイドは楽屋裏を歩く。
舞台から裏へと回り、途中舞台から少しだけだが、天井から吊つて
ある機械を見る。

マイスターが調整などはしてくれてはいるが、作ったのはアルクエ
イドだから細かい調整は出来ないのだ。

アルクエイドは非常に凝った物を作るのだ。

シャンデリアのバーツから吊つている鎖の一つ一つがアルクエイド
が作成したものだ。

故に他に変えが利かない代物なのだ。

吊つているシャンデリアの昇降機も軽くだけだが、配線に不備や引
っ掛かる感覚はないか聞いた後で楽屋の方へ行く。
すると、一室からレンと数人の女性の声が聞こえてきた。

「レン、そろそろ帰るぞ」

アルクエイドはそう言いながらドアを開けて入った。

「あら、もう帰るの？」

室内には数人の女性に囲まれたレンが、先ほどとは違つたドレスを着
てくるくると回っていた。

「えー、もう帰っちゃうの？」

「もつとこまじょうよ

数人の女性が不満の声を漏らしながら目でアルクエイドを睨んでく

る。

アルクエイドがオーナーだと知っている女性は一人だけいるが、他の娘達とアルクエイドを交互に見ながらハラハラしている。

「ごめんなさいね。
もう帰らないと」

レンはアルクエイドが見ているのにも関わらずに、脱ぎ始めた。アルクエイドはレンの肩が見え始めた辺りで外に出ようと背を向けた。

「外で待つている」

それだけ言つとレンの素肌を一部だけだが見たが、気にした素振りを見せずに一言だけ言つてドアを閉めた。

「もう、少しくらい焦つてくれてもいいじゃない」

アルクエイドの変わらない態度に、レンは不満気に頬を膨らませた。その姿に回りにいた女性たちは可愛いと言いながらレンに抱きついた。

アルクエイドとレンがアルカンシェルから出てきた頃にはもうすでに太陽は沈んで夜になっていた。
アルカンシェルは下からライトアップされ、夜でも一層目立つていた。

「なかなか楽しかったようだな」

いつもよりも若干樂しそうな足取りをしているレンを見てアルクエイドは「うう」と言つた。

「ううね、結構楽しかったわ」

アルクエイドの言葉に答えるながら来たときと同じようにウォーカスに跨るアルクエイドの背後に乗つた。

「今から行けば支援課のおにいさんたちの大物取りが見られるかしら？」

「全力で向かつてやるよ。
ギリギリ間に合つだろ」

夜中まで時間があるからなとアルクエイドは答えて、マインツ方向にウォーカスを向ける。

ギュルギュルと地面を擦りながら旋回して、マインツ山道へ一気に加速する。

暗い夜道をウォーカスのライトだけで前を確かめて疾走する。
途中にいる魔獣が逃げる間もなく、ウォーカスの前に展開された槍型の防壁に無理矢理弾き飛ばされていく。

異常な速度だというのに、レンはそれを楽しんでいるかのように髪を靡かせながら気持よさそうに手を細めている。

マインツの手前にある門が閉められた旧坑道の前まで来ると人に見つからないように物陰にウォーカスを止めた。

アルクエイドはレンを抱えるとさうにその上へと飛び上がって行った。

見晴らしが良く、マインツが見える場所に行くとそこには先客が居た。

「これはこれは、今宵は殲滅天使だけが来るものかと思つていたのだがな」

先客の男はアルクエイドを警戒してか、剣の柄に手を掛けていた。

「何もしねえから落ち着いてくれ。

あんたも殺りに来たわけじゃないだろ」

男の横に立つと、抱えていたレンを下ろした。

アルクエイドは男に気にせず、そのまま横に片膝を立てて座った。

物見遊山でもせんと言わんばかりに立てた膝の上に肘をついて手の甲に顎を乗せる。

すると、レンが当然と言わんばかりに自然とアルクエイドの横にしつこい片膝に座る。

「噂に名高い風の剣聖、アリオス・マクレインに出会えるとはな

「名を知られてるのは光榮だが……」

アリオスは語尾をやや強めると剣の柄を握った手に少しだけ力を込めた。

「この地に災いを持ち込むといつならば、容赦はせぬぞ

「心配しなくとも私たちは何もしないわ」

アリオスの挑発と宣告にレンは笑つて答える。

それは言葉通り何もしないから笑つていられるのが、それとも容赦されなくても余裕で対処出来るから笑つているのか……
レンが笑つていると宿からロイドたちが出てきて大型の魔獣とマフニアを取り押さえた。

「どうやら終わったようだな」

「そのようだ。

しかし、まだまだ未熟だ」

「最初はそんなモノじゃないかしら」

「Bが興味を持つのも頷けるかもな」

「アルも興味を持ったの？」

少しだけなとアルク＝イドは答えると頬を少しだけ緩めた。
そして、とても小さな押し殺したようなクククといつ笑い声がレンには聞こえた。

暫く眺めていると崖下の山道に警備隊の装甲車が数台やって来た。

「これでクロスベル郊外を騒がせていた魔獣事件も片付いたな」

「あのワンちゃんたちはあまり可愛くないわね

「戦闘魔獣に愛嬌はいらんだろ」

「そりかしら。

あつたほうが和むじやない

「相手を和ましめていたる」

レンとアルクエイドが会話しているとアリオスは興味は失せたのか、背を向けて歩き出した。

「あら、もう帰るのかしら？」

「ああ……

「そういえばそちらの御仁の名を聞いていなかつたな」

数歩歩いた所でアリオスはアルクエイドへ向き直つた。

「……レギス」

「承知した」

名を聞いたアリオスは再び歩き出そうとしたが、アルクエイドな呼び止められた。

「俺も聞きたいことが有るんだがいいか？」

「内容による」

「あんたが頻繁に病院に通つてるのは嫁でも入院しているのか？」

「私が通つてているのは知つていてるのにその先は知らぬのか」

「俺は最低限のプライバシーは踏み込まない様にしてんだよ」

本当に知らないのか、それとも言質を取つて確認したのか分からな

いが、アルクエイドの真意を探るよつたアリオスはアルクエイドを見詰める。

「……娘だ。

目が見えなくて入院させている

「わづか、なら明日……」

「明日は支援課のお兄さん達が来るでしょう」

「だつたな、明後日ローベンベルグ工房に来てくれ

「素直に行くと思つていいのか?..」

「無駄足にはさせよ

「……気が向いたらな

そう言つて、アリオスは崖下へ降りていつた。

「2人とも素直じゃないのね」

アリオスとアルクエイドの会話が面白かったのか、レンはくすぐすと笑う。

「支援課はびづやく今夜はマインツで過るよつだな

「夜も遅いからね、私も眠くなつてきたわ

「それじゃ、俺らも帰るとするか

欠伸を噛んだレンを来たときと同じように抱えて、アルクエイドは崖下へ飛び降りた。

彼ら三人がいた場所、そことは違う場所で支援課の行動を見ていた者がいた。

その蒼と白の毛並みを持つ狼は三人の行動も気にしていた。特に支援課がマフィアを抑えた後は隠す気すらなく、彼らを見ていた。無論三人はそれに気づいていたが、特に気にしてはいなかつた。崖下へと降りたアルクエイドはレンを抱えたまま、ウォーカスに乗つた。

発進する時に少しだけその狼がいた場所に視線を送つたが、すぐさま視線を戻して山道を駆け降りた。

睡たげなレンを気遣つてか、幾分速度を抑えて出来るだけ振動や排気音が鳴らないように走行した。

かつて何処かで（前書き）

何か良いサブタイ考えてたらいつの間にか寝てました
そのまま特に思いつかずに微妙なのになってしまいました

ヒロインって誰がいいんでしょうか？

なしならなしでいいんですけど、候補はティオ、リーシャ後レンの
誰かで考えてるんですが誰がいいでしょうか？

一応三人とも設定は考えてます

かつて何処かで

「目…か。

目が駄目なら耳で出来ることか……」

深夜の工房でアルクエイドは端末を弄る。

「噂通りならアリオスとほとんど会話すらできてないだろ? な。データデバイスはエニグマで十分か。後は集音と録音、声のトーンか。

……それと1つだけサプライズだな」

アルクエイドは実際に楽しそうに元を歪ませている。

「これで十分か」

「……ん?」

珍しいな、レンが足跡を残したまゝにするとは

背もたれに持たれながら端末に接続されたエニグマを取り外す。

画面内には毎間にレンが弄っていた時のままの物が幾つか残つていた。

「いや、敢えて残しているのか。

面白い子……か。

他には何を見ていた?」

アルクエイドは敢えてレンが目を付けていた面白い子を見ずに他の

を見始めた。

「ルバー・チエ、黒月、何故マフィア…
シユヴァルツ・オークション?
黒の競売場?」

なんでレンがこれを……なにツツ!?

レンが残していたままのマフィア関連の情報。

その中の裏社会のオークションの一つである、シユヴァルツ・オークション。

その出品予定のリストの中に一つばかり気になつたのが入つていた。

「糞が……

まだ俺はそこに出した覚えはないぞ。

一体何処から持つてきやがつた……

端末の置かれた机を壊さんとばかりに力を込めて叩く。

「ルバー・チエ会長マルゴー!……」

アルクノイドは冷たい目でモニターに表示されたルバー・チエ会長を睨んでいた。

翌朝、マイシンの宿場から出てきたロイドたちは警備隊に捕らえた

マフィアを受け渡していた。

しかし、クロスベルのある議員とルバーチェが繋がっていて、ミハを出せば彼らはすぐに釈放されるということを聞くと肩を落とした。

「確かに無駄なことかと思えるかも知れないけど、決して無駄ではないからこれからも頑張ってね。

ノエル、彼らをクロスベル市まで送つてあげて頂戴」

「イエス・マム！」

上司であるソーニャ副司令に言われてノエルはすぐさま敬礼して答える。

彼女はそのままノエルが支援課を送るための一台の車を残して、マフィアを連れて先に山を降りていった。

「それでは皆様、私が責任を持つて送り届けさせて頂きます！」

ノエルがそう張り切つてロイドたちに言つて微妙な顔をして見合わせた。

「どうされました？」

「いや、なあ……」

「ああ、ちよっとな」

怪訝な顔をしたロイドたちにノエルは聞いたが要領を得ない答えしか返つて来なかつた。

「実は今日はこの後、ローゼンベルグ工房に行く予定なのです」

「ローゼンベルグ工房ですか？」

「ええ、だから途中の分かれ道まで送つてもらえないかしら？」

「はい、分かりました！」

エリイの言葉にノエルは敬礼で答えると、五人は車へと乗り込んだ。ノエルは全員が乗ったのを確認したら車を発進させた。

「皆さんはどうしてローゼンベルグへ？」

「昨日あつた人に招待されたんだ」

「招待？」

「ローゼンベルグ工房へ？」

「ええ、その人がとても興味深い物に乗つていたので、それを見ていたら来たら詳しく説明すると言われたので」

「へえー、実は私も昨日、初めて見るものに乗つていた人がいるんですよ」

「お、それはオーバーサイクルつて奴か？」

「そうなんですよ、支援課の皆さんも会つたんですか？」

「ええ、今日はそれで伺つことになつたの」

「誰も入つたことのないあの工房にですか。」

羨ましいですね、私も行つてみたいですね

「それじゃ、ノエルちゃんも行つてみるか？」

「そうしたいのはやまやまですが、仕事がありますので……」

「ところでノエルさん。

先程から気になつてゐるのですが、その腰の銀細工は……」

ティオは腰に付けられてゐる銀細工が出会つた時から気になつていた。

「これですか？

実はこれ、オーバーペットの一番人気タイプなんですよ

「ええ！？」

「一個數十万ミリは下らないといつてア物じやないか！？」

「ノエルさん、一体それを何処で？」

エリイやランディがその事実に驚きの声を上げたがティオは至つて冷静で聞いた。

「実はその昨日あつた人に迷惑料だつて一ひとつは貰つたんです」

「一ひとつも！？」

「それで、そのもつ一ひとつは？」

「その人の審査をした子に渡してあります。
その子の分だって言われましたので……」

「そうですか、残念です」

「ティオ助、まだあつたら貰うつもりだつたのか……」

ティオのその言葉に嘘は苦笑した。

「でも、ティオは確かに持つていなかつたか？」

「はい、持つてはいますが私が欲しかつたタイプではないです。
全く、所長も使えませんね。

どうせ持つてくれるなら私が欲しい物を持ってきて欲しいです」

「いやいや、それでも頑張つたんだと思つよ」

ティオは持つてきてくれたロバーツ所長に對して大きく溜め息をついた。

ティオの辛辣な言葉にロイドは必死にフォローする。

「しかし、それを簡単に渡すなんて一体何者なんだ？」

「そうね、ローゼンベルグの関係者で珍しい物を幾つも持つている
なんて……」

「案外それを作つてる奴だつたりしてな

「まさか」

「…………」

ランティの言葉に全員が笑い出す。

言ったランティ自身も本気で言っているわけではなく、すぐにだよ
なあと言いながら笑う。

その中でティオだけは何か難しい顔をして黙っていた。

「それでは皆様、自分はこれで失礼します」

「ああ、ありがとう」

ローゼンベルグ工房への分かれ道まで来たロイドたちは、装甲車から降りてノエルを見送った。

「それじゃ、向かうとするか」

「わづね」

「…………」

「どうした、ティオ？」

「いえ、なんでもありますん」

ロイドは先程からずっと黙つて居るティオに声をかけるがはぐらかされてしまった。

「銀細工に蒼い髪……やつぱり何処かで・

ロイドたちは階段を登り、工房前の門へと着いた。庭の一角には工具を広げてウォーカスを整備しているアルクエイドと、その背中に凭れるようにエニグマ＝Mを触つて居るレンの姿があつた。

ロイドたちの姿を見ると立ち上がりてドレスを少し持ち上げてお辞儀をした。

「よひーん、ローゼンベルグ工房へ。

歓迎致しますわ、特務支援課の皆様」

レンが頭を上げると閉められていた鉄門が独りでに開いた。ロイドたちは勝手に開いた門に戸惑いながらも、彼らの方に歩み寄つた。

互いに自己紹介を終えた後、ロイドとヒリイはレン、ティオとランディはアルクエイドと話していた。

「なるほど、エニグマを動力に使うことで力不足を補つて居るわけ

ですか

「速度を出すとその分消耗は激しいが、セキュリティーは万全にな
る」

「個体識別番号でロックをかけるわけですね?」

「そうだ、後エニグマのアーツを使うことで事故を極力防ぐことも
出来る」

「しかし、オートで使うには些か危険じゃないですか?」

「現状は威力を下げる相手に怪我させない様にするしかない」

「なるほど……」

何かを思案しているティオに変わって、今度はランティが話しかけ
た。

「なあなあ、俺も乗つてみたいんだが

「乗るのは構わないが、乗用車の免許は持つているのか?」

「あー、持つてねーな」

「一応乗用車として登録しているから、乗らない方がいいだろ?」

「今は警察だしな、皆に迷惑かけるわけにはいかないか」

「一人用だしな、レンタくらいなら一緒に乗れなくはないが……」

「……だったら、私を乗せてはくれませんか？」

「構わんぞ」

「かあ～つ、羨ましいぞティオ助」

アルクエイドはウォーカスに跨るとティオの手を引っ張つて後ろに乗せた。

手を引かれるこの感覚、やつぱり何処かで

アルクエイドはティオを乗せてウォーカスを発進させ、階段を駆け下りた。

「ア、ア、ア、アアア、ア、階段は無茶です！」

一段ずつ揺れの振動がかなりくるのか、ティオは悲鳴を上げていた。

「俺も免許取ろうかなあ」

もつ見えなくなつた彼らを羨ましく思いながら、ランディは呟いた。

「ち、ちょっと、と止めと止めと止めとこー。」

ティオの制止の要求を聞かずにアルクエイドは一気に階段を駆け下りた。

「どうした？」

分かれ道に着いてから漸くアルクエイドはウォークスを止めた。

「はあはあ……はあつ……

どうもこうも、階段を降りるなんて無茶です！」

階段の振動で落とされないように、必死にしがみつるのがかなりキツかったのか、ティオは息も絶え絶えだった。

「レンはいつも平氣そうにしているんだ？」

「レンちゃんが……？」

後で口シを聞いておきます

「そうしろ。

取り敢えず、マインシまで往復するか

「分かりました」

アルクエイドはティオの返事を聞くと、ウォークスをマインシへ向けて発進した。

「これは……

普通に動かすのでもアーツが発動している？」

ティオはウォークスの周りに微かに力を感じた。

力はウォークスの先端から流れていった。

「よく気付いたな。

空気抵抗を出来るだけ少なくするためだ。

そんな小難しいことは考えずに今は乗り心地を楽しんでる」

「……そうします

本音を言えればまだまだ聞きたいことだらけだが、聞いても答えないだろうとティオは思った。

「少し加速するぞ」

その言葉に答「え？」、ティオはアルクエイドの背中を掴む力を少しだけ強めた。

アルクエイドは服が引っ張られる感じが強くなつたことを感じると加速した。

それに伴い、心地よい振動がティオにも伝わっていく。

マインツの前に来た辺りで、ティオはアルクエイドに話しかけた。

「あの、何処かであつたことが無いですか？」

「俺とお前がかかる？」

「そうです」

「……いや、記憶にないな」

「……そうですか」

そのまま、ティオは黙ってしまった。

暫くの間走つて分かれ道が見える辺りまで戻つてくると、コツンとアルクエイドの背中に何かがぶつかって重みが加わった。それが何か瞬時に理解して、幾分速度を落としてそのまま再びマインツ方向へ向かつた。

「寝始めたか……」

レンもそうだったが、女ってのは器用なもんだな……」

ゆつくりと、程良く頬を撫でる風を感じながらアルクエイドは何度も往復していた。

樂園の終わり（前書き）

感想でアルクエイドの年を聞かれたので書いておきます

アルクエイドは19歳です

ロイド、ヒリイが18なんでその上ですね

生まれは共和国です

マイスターに拾われたことはそのうち本編で書ききます

樂園の終わり

「悪いレーヴン、遅れた」

「遅かつたな」

「しつこいのがいてな、うざいからバラしてきた。ガキの田の前でやつしまつたけど大丈夫かね？」

「芸術家というのはそういうもののじやないのか？ その子供には同情するな」

「俺とアレと一緒にされるのは心外なのだが」

「自分の価値観に無理矢理理解させよつとする輩といつ意味だ」

「喧嘩売つてんだろ、な？」

「そんなことよつ……」

「てめえ……

まあいい、今は胸糞悪い『樂園』潰しだ

「」の世に樂園など無いことを教えてやるわ」

そこには銀と蒼、黒の三人がいた。

黒は依然と口を開かず、銀は撫然と冷静に、蒼ははとてつもなく苛立つていた。

黒と銀は剣を構え、蒼は袖からジャラジャラと鎖を垂らす。

蒼が鎖をドアにぶつけて力づくで吹き飛ばす。
それを合図に三人は館の中へ踏み込んだ。

「この日、樂園は消え去った

「もつかい答えて貰おうか？

これの何処が芸術なんだ、ああ？」

「…………」

「放してやれ、もつか既に死んでいる」

「チツ、胸糞悪い。

アレもそつだつたが、こつちもつぜえ。

生き残りはいたか？」

「一人だけな」

「こいつは……」

「この傷は恐らく自分で付けたものだらう」

「そうじやないと耐えられなかつたか。

裏の世界は何処も彼処も狂つてなきややつてられないよな

自嘲する笑みで蒼が言つと銀は聞く。

「まだ、後悔しているのか、この世界に入ったことを

「別にしてないよ。

「マイスターにや感謝してるし、生か死かって言われたら生だろ、

普通」

「お前はまだ子供なんだ、泣きたい時は泣けばいい

「涙なんざ、友達だちに殺されかけた時に枯れたりての……

俺は覚えちゃいないがな……」

「だからアルはレンの王子様なの」

「ははっ、王子様か」

「レンはお姫様なのだから王子様なの」

「ふふ、羨ましいわね」

アルクエイドがティオを乗せて駆け下りると、レンはロイドヒーリイに馴れ初めを語つていた。

無論大幅にぼかしてはいるのだが……

「ア、ア、ア、アアア、ア、階段は無茶です！」

それを微笑ましく笑つていると、悲痛な声が聞こえてきた。

「…………」

「なんだ、今の？」

「あ、ああ……？」

「もう、レン以外の人を乗せるか……」

「えっと、レンちゃん。
今のつて……」

「アルがウォークスにレン以外を乗せたら皆叫ぶのよ。
すつごい乗り心地が良いのに」

アルクエイドがレン以外を乗せているからなのか、それともウォークスに乗っているのに悲鳴を上げているから不満なのか、レンは面白くなさそうな顔をしていた。

「ねえレンちゃん。

アルゲントウム製品つてもしかして此処で作られているの？」

「いいえ、でも作っている人なら知つているわ

「本当なの！？」

「誰なんだ！？」

「誰つてアルよ？」

「あの人ガー!?」

「マジかよ……」

ティオとアルクエイドが走り去つて暇になつたのがランディもロイド達の方に寄つて来ていた。

「だから気軽に一つも渡したのか……」

「私のこれもアルが作つてくれたのよ」

そつまつてレンは懐からエニグマ＝Mを取り出す。
エニグマ＝Mはアルクエイドが作つたものでレンしか持つていらないのだ。

オーバーペットはもともとアルクエイドがパテル＝マテルのために作つていたものだ。

しかし、まだ完成はしておらず、完成のためのデータ収集のために売りだしたものだった。

「エニグマにオーバーペットが入つてゐる……」

「つてか、これ端末みたいに画面通話も出来るぞー!？」

「何者なんだ、あの人は……」

ロイドたちが驚愕する中でレンは終始笑っていた。

夕方になつてアルクエイドはティオを抱えて歩いて階段を登つてきた。

ウォームスに乗つたまま登ると振動で目を覚まされても困るし、落ちたら少々の怪我では済まないからだ。

結局、ティオが一度も目を覚ます事なく、ローゼンベルグ工房に戻ってきた。

「……ん…あ？」

「起きたか」

アルクエイドの背に乗せられていたティオは門が見える位置まで来るとよけいに目を覚ました。

「……っ！？」

「も、もももう大丈夫です、下ろしてくださいー！」

自分が何処で寝ていたか気づくとティオは慌ててアルクエイドの背から下りた。

「……不覚です」

ティオは大きく肩を落としていた。

「小さい体で特務支援課を頑張っているんだ。
疲れていて当然だわ」

「小さいは余計です」

「悪かった」

アルクエイドの言葉に少しだけ機嫌を悪くしたように見えたティオ
は早足で工房へ戻つていった。
しかし、ティオの口元は少しだけだが、緩んでいた。

その後、ロイドたちは彼らを別れ、クロスベル市へ戻つた。
アルクエイドとレンは彼らの背中が見えなくなるまで見送つていた。

「レン、後でティオ・プラターの経歴を調べておいてくれ」

「あら、急に女の子を調べてくれなんて……惚れたの？」

「…………」

「冗談よ冗談」

「ティオ・ブライターに何処かで会つたことはないかと言われたんだ」

「ふうん、それは気になるわね。

引き籠もりのあなたに出来つなんてよつまどじよ」

「やがま
喧けんしへ」

アルクエイドは相手に出来んと言わんばかりに工房の中へ入つていった。

レンはそんな彼を気にせずに、ロイドたちを見ていた。

「ふふ、これはちよつと私たちも面白くなりそうね

レンは嬉しそうこつまでも笑つていた。

余計な荷物（前書き）

何故かレンとの絡みが書きやすいんですね
そのためなぜかレンがややえつちい娘に……
もひとつも今回は全く出でたきをませんが

余計な荷物

ロイドたちが支援課に戻るとそこにはあの蒼と銀の毛並みを持つ狼がいた。

疑惑を晴らした礼としてサポートするために住み込み、警察犬として登録された。

既にあの魔獣事件から一週間が経っていた。
特に目立った事件もなく、支援課のメンバーは比較的平和な日々を過ごしていた。

「また駄目でした」

そう言つて、無表情な顔でティオは事務所に入ってきた。

「よくあれだけ断られていながら、ティオ助も毎日通えるな」

既にこの光景は珍しくなくなっていた。

「初めてそう言われて入つてきたときは何かと思つたよな」

「そうね、あからさまに肩を落として入つて来たわよね」

ローゼンベルグ工房に行つた次の日からティオは通い始めた。
初日の落ち込み具合は全員が驚愕した。
何があったのか聞くと頼みを断られたという。
今ではさほど落ち込んだ様子はなく、皆もまたかと言つて苦笑していた。

「けど、毎日何処に行つているんだ?」

「初日はHBCのビルに調べ物へ、次の日からはローゼンベルグ工房です」

「ローゼンベルグへ？
何しに行っているんだ？」

「そんなの決まってるじゃないか。
あのオーバーペットを譲つて貰いにだる」

「ランディさんは失礼です。
私がそこまで欲しがっていると思つていいのですか」

「そうだぞランディ。
いくつ……」

「まあ、断られましたが……」

「って頼んだのかよー。」

「はは、ほらな」

「はあ……

あまり迷惑かけないよつにな」

「分かつてます」

やつぱり、ロイドはトランファーの整備に、ランディはグラビア雑誌に戻った。

エリイは自室へと階段を上つてこつた。

ツァイトはいつも通り屋上で日を浴びているだらつ。ティオもエリイに続いて階段を上つていった。

自室に入ったティオは机の上に置いてある紙束に目を通す。そこにはアルクエイドについて書かれていた。

しかし、アルクエイドについて書かれていることは少なく、一枚目の半分にも満たない。

他の紙はオーバーベット等のアルゲントウム製品とオーバーサイクルについてだつた。

「IBCのネットワークでも何もないなんて……」

最初は自分の閲覧できないとこに保存されているのだと考えて、エイオンシステムを駆使してまで調べたが掠りすらしなかつた。だから、次の日からは本人に聞きに行つたが、あなたは何者ですか、なんて聞けるはずもなく、アルクエイドについて分かることは何も増えなかつた。

分かつてていることは名前とアルゲントウム製品とオーバーサイクルを作つたことだけ……

「謎過ぎです、怪しそぎます……」

咳きながらティオはベットに飛び込んだ。

ギシギシとベットは軋むが気にせずティオは転がる。そして、枕元にあるみつしい人形を抱き寄せた。

「私はあの人かどうか確かめたいだけなのに……」

ティオの脳裏に甦るは忌まわしい記憶。

あれから長いときが経つが未だ忘れる出来ない。

それはロイドの兄である、ガイ・バーニングスが助けに来るよりも前

のことだった。

最初は夢だと思っていた。

いや、今でもアレは夢だつたんじやないか？

辛い日々から逃避するために見た幻だつたんじやないか？

そう思う。

-確かにあの人は蒼い髪に銀色の何かを持つていた -

何度も夢じやないと信じながら……紅く染められた光景を……
忌まわしい記憶に体力を消耗したティオは何時の間にか寝付いていた。

その頬には一筋の涙が流れていた。

「これがティオ・プラターの経歴か。

幼少の頃に失踪、三年後にウルスラ病院に入院、その数ヶ月後に家に帰る。

しかし、馴染めずにエプスタイン財団に出奔。

そして、今回オーバルスタッフのデータ採集のため特務支援課に協力……」

レンが集めた情報を読み上げて、忌々しげに紙を机に放り投げる。

「「」の失踪の間の場所と内容、出奔の理由は無いのか？」

「私が調べた限り無かつたわ」

アルクエイドはレンの返事に苛立たしく髪をかき揚げる。

それは知りたいことが無いからではなく、恐らくティオが他人に知られたくないことを知つてしまつたからだ。

しかし、レンは嘘をついていた。

レンはちゃんとティオが何に拉致されていたのか、知つている。

不幸にも、それはレンが拉致された集団の一部が楽園だったからだ。アルクエイドはレンの過去を聞いたことはない。

それはレンが聞かれたくないと思つていても思つていていたからだ。

実際、レンはそれをアルクエイドに知られたくなかつた。

一度それに繋がる情報を渡せば、すぐに知るだらう。

だからそれを渡せなかつた。

アルクエイドも他からレンの過去を聞くのは良しとしないだらう。本人が知られたくないなら尚更だ。

ティオの過去も細かいとここまで知る気はなかつた。

ただ何処で会う可能性があつたか知りたかつただけだ。

「迂闊だつたか……」

ヤバい可能性は大いにあつたのだ。

あの年で警察、しかも特務支援課という特殊な場所、そしてアルクエイドに会つたことが有るかもしねり。

これだけでティオに何かあると知るには十分だつたのだ。

「自分の荷物、勝手に背負われちゃ 気味が悪いよな」

アルクエイドは目の前のレンが調べたティオ・プラターの経験を握

りつぶした。

「少し出かけてくる」

「何処に行くの?」

「HBC本社」

「こつてらつしゃい

珍しくウォータスに乘らずに、アルクエイドは「コートを掘むと上房から出ていった。

蠱ぐ死神

アルクエイドは歓楽街から裏通り、広場から東通りへと周り、港湾区歩いていた。

「ルバー・チエ、黒月、黒の競売場、政治に金融か……人の闇と言うよりかは欲の集合だな」

アルクエイドは皮肉な笑みを浮かべながら一通りのクロスベル市を見ていた。

「特務支援課が出来るわけだ。

確かに遊撃士だけじゃ踏み込めない場所が多くすぎる」

ローゼンベルグ工房に来てから一週間経つが、アルクエイドは初めてクロスベル市を散策していた。

「だが、欲の中にこそ、闇は紛れやすい。
欲の方が目立つからな」

アルクエイドは口元を歪めながら、IBCビルの正面に辿り着いた。

「俺も欲に紛れさせてもらおう」

ガラスのドアを潜り、受付へと真っ直ぐ歩く。

「ディーター・クロイス社長と面会したい」

「社長と……？」

訝しむ受付嬢はアルクエイドを品定めするかのよほな顔で見る。いきなり社長と面会したいなどと言つてきたら当然の話だ。

「失礼ながら、どうやら様でしょつか？」

「Aが来たと言えば分かる」

その視線を全く気にせずに答える。

その答えを怪しく思いながらも、受付嬢は社長と連絡を取つた。

「社長、今受付にAと名乗る方がお見えになつております。社長と面会したいと仰つていますが……

畏まりました」

如何にも事務的な応答をした受付嬢はアルクエイドの方に一枚のカードキーを差し出した。

「此方のカードキーをお使い下さい。

Hレベーターの端末に御使い下さい」

アルクエイドは受付嬢の話を全部聞かずに、カードキーを手渡されるところをHレベーターに入つていつた。

そんなアルクエイドを怪しく思いながらも、常務へと戻つた。

「君はいつも順序を踏むのに最後で飛ばすんだい？」
扉が開かれる事なく、ティーターの座つている前に突然現れたアルクエイドに驚くことなく聞いた。

「別にいつも訳じやないだろ」「君がそう入つてくるときはいつも面倒事を持つてくるだろ？」「ティーターはアルクエイドに見向きもせずに書類に書き込んでいく。「それで、今日はどんな用だい？」

「黒の競売場……
この招待状が欲しい」

「…………」

その発言を聞いたとき、ティーターは依然と動いていた手が止まつた。

「先刻私が言つた言葉に偽りないじゃないか」

「否定した覚えはないが？」

「本当に君は嫌な性格をしているね」

「お前が言つたか」

元から和氣藹々等といった雰囲気ではなかつたが、一気に殺伐とした空氣に変わる。

「何故それが必要なんだい？」

「気になることがあるってな

「しかし、私にも……」

「いいじゃないですか、お父様」

彼らの会話を聞いていた一人の少女が居た。
彼女はそう言いながらドアを開いた。

「彼に隠し事をしても得はないでしょ。」

むしろ、彼から借りを作るチャンスではなくて？

「一度いいことに複数来ている訳ですし」

ディーターの娘であるマリアベルにそう言われて、溜め息をつきながら彼は机の引き出しから一通の手紙を取り出した。

「借りはそのうち返す。

後、アレのデータを貰つて帰るからな」

それを受け取つてアルクエイドは入つてきたとあと回りよつて音もなく消えた。

「彼の要求はいつも無茶ばかりだな

「いいじゃありませんか、彼には得させてもらっているのですから」

「最も、アレのデータで何をしているのか分からぬがね」

「私たちと組んで利がある限り、彼は裏切りませんわ」

ディーターは厄介^{ごくわい}ことを抱えたように苦惱^{くのん}していたが、それとは逆にマリアベルは頬を歪ませていた。

マリアベルはそう言^ううが、ディーターはそうは思^はわない。

彼は独自の正義、思想で動いているのだ。

そういう輩が一番厄介だ^{ごくわい}だ^{ごくわい}のを知^しつているのだ。

そういう輩に限^{かぎ}つて、どんなに逆境でも、可能性がなくとも、死に

かけでも、絶対に諦めないし、挫けない。

だからこそ、そういう時に何をするか分からぬ^{わからぬ}のだ。

だからディーターはアルクエイドを信用しない。

ウルスラ病院の一室。

ここにアリオス・マクレインの娘、シズク・マクレインは入院して

いた。

彼女の部屋には少女特有のぬいぐるみなどが存在していなかつた。殺風景な病室を彩^{いろど}るのは花瓶に添えられた花くらいだつた。

「それでね、こないだ来た支援課の人たちが……」

「そうか」

彼女は彼女以外誰もいない部屋で一人喋っていた。

まるでそこに父親が居るかのように話す。

とは言つても、彼女が寂しさからおかしくなったというわけではない。

彼女の寝台の近くにある机の上にある機械が置かれていた。

そこからは父親の声が聞こえていた。

それはシズクの話に相槌を打ち続けていた。

楽しい話にはアリオスの声も嬉しそうに、シズクの声のトーンに合わせてアリオスの声も変わっていた。

その機械はロイドたちが来た次の日にアリオスの声を録つて、創り上げたものだ。

その為に、アリオスは異常な量の質問を答えさせられていた。

さらにその答えを元に、アリオスの性格を把握して声を入れたのだ。そして、シズクの話に相槌だけだが、出来るようになつたのだ。この機械はそれだけでなく、シズクの会話を同時に録音している。仕事の休みのときに入るアリオスが機械の中にあるメモリを入れ替えて、後でアリオスが聞けるようになつてている。

最初は抵抗があつたシズクも今となつては嬉々としてそれに話しかけている。

時には看護士達との会話を録つたりしている。

シズクはたまにしか来れないアリオスと疑似会話とはいえ、楽しめるようになつっていた。

ある意味、ビデオレターみたいなものだが、相槌だけとは言え、会話を楽しめることに違いはなかつた。

長いこと入院しているからある程度寂しさには慣れているとはいえる、まだまだ親に甘えたいのだ。

そこにコレをプレゼントしてくれた。

差はあるといえ会話出来る。

休日には一緒に出掛けで会話を出来るかし足りないのだ。

たが、アルケエイドは親切心だけでこれをアリオスに渡したのではない。

全ては
が原因だつた

が原因だつた

夜闇に悲鳴が響く。

いた。

充満されていた。

須らく、それを見つけた人物はあまりの嘔せ返る臭いと死体の惨さに、その場で嘔吐したという。

ぐ
くるなああああああああああああああああ！？」

今夜の被害者はこの男だった

道端の障害物を蹴り飛ばしながら、時にはそれに足を盗られて転び
迫り来るソレから必死に逃げようと走りまくる

ながらも逃げ続ける。

それでもソレからは逃げれない。

自分を「転ばしたもの」を投げても避けられる、当たらぬ。
ゆらゆらと揺れながらソレは一定の距離を保つ。
縮まる」とも長くなる」ともない。

「なんでッ、追いかけてくるんだあああああーーー?」

ソレは一言も発しない。

いや、人であるのかさえ分からぬ。

ソレからは人らしさが微塵も感じられない。
時に何かが体を裂くが、獲物は分からぬ。

「ぐあッッ、ややめ、やめてくれ、い嫌、嫌だああああああああ
あああああー!」

「の口新たに一つのバラバラ死体が出来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5147y/>

英雄伝説 - 刹那の軌跡 -

2011年11月24日12時55分発行